

「もの」に感謝の心

供養の対象が広がる

背景に「故人の尊厳」「日本文化の保存」

「人形よ、誰がつくりしか、誰に愛されしか、知らねども、愛された事実こそ、汝が成仏の誠なれ」。臨済宗単立宝鏡寺門跡(京都市上京区)で14日、京人形商工業協同組合主催の「人形供養祭」が営まれた。当日に持ち込まれた約300体を境内の人形塚横に安置し、冒頭の武者小路実篤の詩を朗読してから田中恵厚住職(59)らが読経した。人形から針や包丁、そして携帯電話やパソコンなどにも広がりを見せる「もの供養」。その背景には、これまでとは違った意味も含まれているようだ。

(吳恵順)

人形や針、携帯電話、パソコン……



古来、日本人は「八百萬の神」「草木国土悉皆成仏」などの宗教的な考

えから「全てのものにはいのちが宿る」として愛玩具や生活必需品を大切にし、室町時代以降は役

目を終えた「もの」を感謝の意を持って吊り上げてきた。現在、人形供養だけでなく全国100カ所以上で行われている。2010年に「もの供養」に関する論文を発表した関西大学社会学部の池内裕美教授(46)は「その大半はここ50年で始められた行事だ」と言う。

一般社団法人遺品整理士認定協会が運営する「MISお焚き上げステーション」(北海道千歳市)は、従来の「もの供養」に加えて、携帯電話やパソコンの供養なども受け付けている。「MIS」は「メモリアル・遺品・整理」の頭文字をそれぞれ取ったもの。同

協会副理事長の小根英人さん(37)は、遺品整理の経験から「それらの供養には、個人情報保護する目的もある」と言う。「現代人が肌身離さず持つ携帯電話などは個人情報やデータの流出防止のためにデータを完全に消すことが必要」。過去には故人の携帯電話に保存されていたデータにより、大きなトラブルになった事例もあるという。

同ステーションの開設は2013年11月。郵送でも受け付け、2日に1台の割合で携帯電話などが送られてくる。施設内の祭壇で僧侶による読経

の後、細かく粉砕し、800度以上の高温で焼却。5分後にはほぼ灰となる。小根さんは「機器を大切に扱ってきた故人の思いを供養する」とも、尊厳を守ることも必要。遺族の心のケアの観点から、今後「こういった機器の供養は増える」とみ



法要後、並べられた人形に手を合わせる田中住職。宝鏡寺の人形供養祭は京人形関係の物故者供養祭も兼ねている